能美市立福岡小学校　学校評価後期評価　（評価1は中間、2は最終　〇は中間以降の重点強化項目）

重点目標（めざす姿）		2学期の取組状況	評価1	評価2	今後の改善策（いつ・誰が・何を・どんなふうに・ねらう子どもの姿）	学校運営協議会による評価・感想
1	組織的な学校運営	【教職員ｱﾝｹｰﾄ】⑪100%↑ 校訓「誠実・自彊・規律」の見られる姿をゴールとし、「チーム学校」として学期ごとのキーワードを掲げ、「対話」を重要視しながら重点的な取組のPDCAを試みてきた。運営委員会にてねらいや方針を協議し、3部会において各主任の指導・助言の下、ロードマップを確認しながら取組を進めた。	C	A	今年度末に、全職員で「育てたい児童の姿」（校訓や「啓道」の理念の具体化）を協議共有する場を設け、全職員が理解しながら児童の成長につながる重点的な取組と育成のためのステップを明確に共有し、次年度のスタートからより高い意識での実践展開や検証を行っていく。	組織的に学校が運営されているかは。子どもの表情を見ると概ねわかる。が、客観的評価は難しく、先生方の評価を信じる。 また、担任の先生方の学年経営等の思いを受け止めてサポートしていきたいと考える。どこかで談話・共有できる場があるといい。
		【児童②89%↑】【保護者⑦82.6%↑】【教職員①100%↑】 2学期「一人一人を大切に」というキーワードのもと、児童会が「学校での日常生活を振り返り、改善を図る取組」を継続実施したり、人権集会等で学級の課題を児童が自覚し対応策を考え、集会発表という場を通して共有化し全体の意識を高めたりするなど、児童の主体性を重視しながら取り組んできた成果を感じる。教師側も、QUの結果や改善策を共有化し、それを踏まえて各学級で次学期の取組の計画を立てるなど、学校全体でCとAの充実を図ったことも効果的であった。	B	B	経年的な課題として継続し改善傾向にある「自己有用感」「達成感」「自信」を高める取組を、主体性の育成や見通しのある意図的な取組につながるよう充実させる。今年度までに積み上げてきた取組を組織性・計画性を高め充実させることで、いじめの未然防止や自己有用感のさらなる向上に努め、「来たくなる・通わせたくなる学校」づくりにつなげていく。	
2	知（確かな学力の育成）	①(授業改善と学力の向上）【児童⑥ 94%】【教職員⑤ 100%】【保護者② 86.8%】 まとめだけでなくふり返りの時間も確保することは、児童も教職員も当たり前に意識できるようになった。しかし、ふりかえりはしているが、単元や授業のねらいに応じたふり返りができていない児童も多い。また、教師に与えられたまとめを写しているだけで、まとめが自分のものになっていない児童も多い。課題解決をより意識し、自分で学んだことをまとめるという意識改善を行っていく必要がある。	B	B	道徳科の授業づくりや研究授業を通して、ゴールを明確にした授業づくりを推進していく。そのために、どのように見取るのか、どのような言葉で表現してほしいのか、具体的に児童の姿を確実にし達成させるようにすることで、確かな学力の定着につなげる。	家庭学習についての保護者の評価が低いのが気になる。アンケートの文言の修正が必要か。また、保護者への啓発の強化も必要ではないか。できることがあれば支援したい。 九九検定など、学習サポートの可能性を広げ基礎基本の定着に助力したい。 また、身につけた技能や知識を応用・活用する場を工夫して「学びを活かす力」をつけてほしい。 自然発生的な対話も約立つと思う。九九検定などを高学年に聞いてもらって対話や関わり=コミュニケーション力につながるといい。
		②(基礎・基本の定着)【児童⑱ 91%】【保護者③ 64%】【教職員⑥ 100%】 「朝学習で学習した事ができるようになってきている」と実感する児童が微増した。今後も続けていきたい。家庭学習は、強化週間時に九九練習など家庭の協力が必要な課題を出し、効果的に進められた学年もあった。2年生以上は、自学ノートに意欲的に取り組む子も見られた。活用問題は5年生以外、宿題で実施できなかった。チャレンジ学習は児童の学力向上、活用力育成に役立ったが、次年度他教科の授業時数増により、授業時間以外で同様の学習を工夫して行う必要がある。	B	A	第3回家庭学習強化週間では、職員に事前に例を示し、全学年が効果的な家庭学習課題を出せるようにしていく。また、次年度、学習意欲の継続、基礎基本・活用力向上からも、全学年系統立てた家庭学習の出し方を検討する必要がある。活用力育成に関しては、学級裁量の時間を残しつつも、朝学習等で意図的・計画的に行う必要がある。	
		③(学び合い・言語活動, 活用力の育成)【児童⑤ 90%】【教職員⑯ 84%↓】 教職員の評価はT が上がったが、対話の質に対する意識は高まったと感じる。今後は、対話の機会を増やすだけでなく、質を高める必要がある。授業で対話の機会を増やしたことで、児童の話す量は増えてきた。しかし、対話をさせることがゴールになっていて目的意識が低いことが課題である。また、話したことで自分の考えがまとまった、できるようになったという学びの自覚化にどうつなげるか工夫する必要がある。	B	B	話し合ったあとに自分の考えを再構築する時間を確保したり、学び合いがどのように学習活動に生きたかという視点でふりかえったりすることで、話し合うだけでなく学び合うという意識を高めていく。対話における目的を明確にしてから対話させることによって、何が分かったのか自覚できるようにする。	
		④(学力の検証）【児童⑮ 78%】【教職員⑦ 83%↓】 2学期、国語、算数の中で「学習用語を使い、根拠や筋道を説明する力（条件に合わせて書く力）」を重点的に育成する単元を選び、実践した。その結果、児童も教職員も意識の向上は見られた。しかし、検証する問題で問題を読み取る所に多くの児童がひっかかってしまい、「読解力」の向上も課題と判明した。話し合いでは、伝える側の一方通行が多く、双方向の話し合いにまでは全体的にまだ至っていない。今後も「話す力」・「聞く力」を育てていく必要がある。	B	B	国語科では、「話す・聞く」で学習したことが使える単元を教科関係なく選定し、実際に活用できるようにしていく。算数科では、算数用語を使う事を常に意識させ、図形の場合、指差しながらどこの説明をしているのかわかるようにする。単元の中で説明の時間を意図的に設定し、個人→ペア→段階をふんで、全員が説明できることを目指す。	
3	徳（豊かな心の育成）	【児童⑯92.5%】【教職員⑰100%】 人に嫌なことを言ったり、したりしてはいけないという意識があり、互いを大切にしなければならないという思いを持っている子が増えている。自分が失敗して他人に嫌な思いをさせることがあっても、振り返りそれを認めて謝罪できたり反省したりすることができる。しかし、雰囲気で流されたり、やりすぎたりしてしまいルールが曖昧になることがある。	A	A	QU2回目のデータを分析・活用し、学級全体の問題点を把握し、学級経営の方針を明確に示すことを続けていく。並行して、個別に問題を抱える児童へのサポートを行っていく。トラブルや問題が起きた時は「成長のチャンス」と捉え、子どもたちに何が良くなかったのかを振り返らせる等、児童自身にこれからの「ゴールの姿」を考えさせる指導をしていく。	廊下は歩く・メディアの時間を守るなど、子ども自身も周囲も理由が明確でありながら、守りきれないことがある。子ども・学校はもちろん、全てが一丸となって確固たる心で協働する必要がある。 道徳の研究をしていることは大切だと思う。授業で終わらず、学活や児童会活動等、子どもが自覚化・実践化できるように、心の自律につながる工夫を今後もお願いしたい。
		【児童⑩94.0%↑】【教職員アンケート⑨92.3%】 5，6年生については肯定的評価の回答が１００%であり、意欲的に活動できている。しかし、4年生では否定的な回答をした児童が若干多く、次年度高学年になるという意味でも課題である。	B	A	5・6年生については、意欲的に活動できているので、活動内容の更なる充実を目指す指導をしていく。4年生については、高学年になるという意識をさまざまな活動で気づかせ、自主的・主体的な姿を認めていく。	
		③(道徳教育)【児童⑪ 80%】【教職員⑫ 100%】 児童の評価が8%増加したのは、ふりかえりシートを全校で統一したことによって、個人で考える時間をしっかりと確保できたと児童自らが感じられたことによると考えられる。また各教室で板書の掲示をすることによって、学んだ価値を日常生活とつなげたり、必要に応じてふり返ったりすることができた。	B	B	ふり返りシートに書く時間を確保することはできるようになったが、以前の自分と比較して書くことはまだ難しい。今後は今使っているふり返りシートを本校の実態に合わせたものに変え、変容の自覚化・思考の再構築から実践につながるよう工夫をしていく。	
		④(読書指導)【児童⑫ 79%】【教職員⑬ 100%】 2学期は、学年に応じて多読を記録するカードを変え、中・高学年は、全分類の本を読むことができるようにした。また、読書月間で行った「謎の本X」の取組では、教科書に掲載されている本等、児童があまり目を向けない本を読むことができるようにし工夫した。これらの取組によって、様々な分類の本に興味を持つ児童が増え、児童の読書の幅が広がったと考える。	B	A	来年度の4月から始まる図書電算化に向けての作業が始まるため、3学期の本の貸出はできず、児童が本にふれる機会も少なくなることが考えられる。3学期の読書活動を充実させるために、各家庭の本を持ち込みOKにする等、取組を工夫する。その際、図書委員と話し合い、分類に関連付けたルールづくりをしていく。電算化以降は、そのメリットを共有し読書が充実するよう担当教諭・司書・児童委員等を中心に活動を工夫していく。	
4	体（健やかな身体の育成）	【児童⑬96%↑】【教職員⑭92%↓】 鉄棒運動では、「がんばりカード」を用い、上がり技、回り技、下り技を系統的に表したものを参考にして個人の目標を立てた。段階的に技を掲示したことで、練習すべき技が明確になり、意欲をもって取り組んでいた。	A	B	新学習指導要領に基づいた体育チェックシートを継続することで各学年の目標を明確にし，体力の向上を図る。個人の運動だけではなく仲間と目標に向か合って取り組み，より運動が楽しいと感じられるようにする。休み時間の練習では、学年によって取組に差があった。学年を超えた交流の機会や全校での取組を工夫し、個々や全体の目標をさらに明確に持てるようにしていきたい。	生活習慣を見ると子どもによって差があるが、最終的には、自分で時間を考えて行動できる子になることが狙い。10月の全校授業はよかった。このような学校地域家庭ぐるみの明確な共有の場を今後も設定して、その場で話し合い、自覚化・実践化につなげる場を設けてほしいい。
		【児童⑭98%↓】【教職員⑮100%↑】 持久走練習や持久走大会では、CSの方々のご協力を得て、安全に見守りを行うことができた。鉄棒月間では、体育委員の児童や職員が見守る中、ひた向きに練習する子どもの姿が見られた。	B	A	けがや病気予防についての知識・技能として、インフルエンザなどの感染症の予防策を職員・児童に指導する。鉄棒などの器械運動の指導の際には，けがの危険性・予防について指導し，すべての児童の安全に心がけ児童自身の意識を高めていく。器具の使い方については、安全な場所の設定や人の配置などを申し送りとして残し、年度やクラスが代わっても継続して取り組めるように配慮する。	
		【保護者⑫82．5　%新】 ホットネット講座は、親子で同じ内容の講演が開けたことで、家庭への声掛けがスムーズになった。そのあとの学級懇談会で、話題にしたことで保護者の危機意識が強くなったと同時に児童自身もゲーム依存やネットトラブルの危険性を自覚するようになった。	B	A	保護者や地域の方々を巻き込んでメディアコントロールについて考えることができたので、継続して学校内外の組織と連携した意識づけをしていく。	
5	家庭・地域との連携	【保護者⑤69.9%↑，⑬87.3%↓】【教職員⑱100%↑】 どの授業参観の参加率も90%を超えており、親子対象のメディア学習会としての講演会も予想を超えた参加状況であった。地区懇談会で熟議を取り入れたり、学級懇談会で、もできるだけ多くの保護者にアクションプランの項目を核に家庭での現状や具体的な取組を交流し、意識が高まるようにPTAとの協働化に努めてきた。 課題の一つである挨拶については7.5%上昇した。ラジオ体操の取組や各家庭での声かけ,CS委員等からの積極的な挨拶が成果をもたらしたと考えられる。	B	B	昨年度よりもCSや各町内会長、PTAの連携もスムーズで地区ごとの取組意識は向上した。今後も意図的計画的に対話の場を設け、協働意識と実働化を図っていく。その一つとして「地域の防災」を視点に「子どもと地域を守るネットワーク」づくりに取り組んでいく。	町内とのつながりは始まったばかりである。「結」の精神をうたう地区もあり、町の活性化・持続化のためにも今後ますます「開かれた学校づくり」をすすめていく必要がある。 防災を新たな切り口として、次年度連携を探り必要感・達成感のある事業としていきたい。
		【児童⑰81%↑】【教職員⑲100%↑】 地域学習の取組は例年同様に実施しており、児童アンケートの数値も一学期より上昇し、昨年度並となった。CSでは、「役員会」を「定例会」とし、自由に参加できるようシステム変更をしたところ役員以外の参加が増え、学校運営の成果や課題の共有・協働意識が高まった。町内会長会やPTA地区懇談会での熟議がスムーズに進み「次の一手」につながったことはCS効果の表れといえる。	B	B	本年度の「学校安全総合支援事業実践委員会」や「福岡町やさしい道路空間づくり協議会」のように、地域における安全な生活の拡充に向けて関係機関との協働を主軸の一つとして、学校と家庭・地域が、子どもを真ん中に絆を強くする取り組みを工夫していく。	